

毎月二十五日定期刊行



大正三年五月廿三日印刷
大正三年五月廿五日發行

〔定價三錢〕

長野縣四筑摩郡福嶋町四〇四番地
編纂兼發行人 安井正夫
長野市無町、已三番地
印刷者 田中彌助
長野市西后町乙廿一番地
印刷所 長野新聞社活版部
長野縣四筑摩郡福嶋町二八九番地
發行所 蘆澤書店

岐蘇林友
第五十五號目次

調査、臺灣想恩樹の生長量及收穫
雜報、學校便り 校友會便り
寄宿舎便り
通信、稽程一千日 春の島より 矢
島駒二君より
詞藻、秀吉家康性格差異論 人生趣
味の生活 春雨の後 新録
和歌
雜報、數件

奉 悼

昭憲皇太后陛下の
御斂葬に際し至慕
哀切の情に堪へず
茲に虔みて奉悼の
微忱を表す

木曾山林學校校友會

調 査

臺灣北部に於ける想恩樹の生長量及び收穫
調査に就て (承前)

第二節 地位の調査

前述の方針に基き各所に亘りて地位判定用
標準地を撰定せり即ち

桃困廳下四個所

新什廳下六個所

台中廳下三個所

而して各所に數本の標準木を撰ひて伐採し
其年齡と全長を測定せり之を表示すれば

第一表 (内地に於ける行政區域に徴ふときは台灣に於
ける座落廳は廳堡は郡庄は村土名は字と見て
大差なし)

番 座 落 樹齡

桃困廳下

桃洞堡南嶽下社

桃洞堡南嶽下庄

樹高尺
地況林況ハ後に第
四表に示すを以會
略イ以下同斷

五年生 八〇〇 第四表第
六同同 三〇〇 一號地と
八同同 六〇〇 同
九同同 三〇〇 同

全堡 廟口庄土名羊稠口

海山堡三層庄土名

三層

二竹北二堡二重溪庄

新竹廳下

ホ竹北二堡猫兒錠庄

竹北二堡横山庄

四同同 二九〇 第三號地
九同同 三〇〇 同
十同同 三〇〇 同

五同同 二七〇 第四、五、
七同同 三〇〇 六號地に
二同同 三〇〇 同ト
三同同 三〇〇 同
六同同 三〇〇 同

四同同 二〇〇 第八號地
五同同 二六〇 同
七同同 二六〇 同
九同同 三〇〇 同
十同同 三〇〇 同

五年生 八〇〇 第九號地
八同同 三〇〇 同ト
三同同 三〇〇 同

四同同 二九〇 第十號地
六同同 三〇〇 同
八同同 三〇〇 同
十同同 三〇〇 同

之によりて見るべきは樹高生長の最大なるは前表中を以て示す如き結果を見る之を換言すれば即地味良好なるに從ひ連年生長人にして加之最大の時期少しく早きが如し而して各位ともより次第に下りて十一年に至りては約半数となり十四年に下りては著しく減じ來れるべし一般に高さの生長は五年生時代を以て最大とし漸次遞降するを見る

樹地	年令	I	II	III
第三表	三	四、〇	三、五	三、〇
	四	五、〇	四、〇	三、〇
	五	四、五	四、〇	三、〇
	六	四、〇	三、五	三、〇
	七	四、〇	三、五	三、〇
	八	三、五	三、〇	二、五
	九	三、〇	二、五	二、〇
	一〇	三、〇	二、五	二、〇
	一一	二、五	二、〇	一、五
	一二	二、五	二、〇	一、五
	一三	二、五	二、〇	一、五
	一四	二、五	二、〇	一、五
	一五	二、五	二、〇	一、五
	一六	二、五	二、〇	一、五

般思想樹の樹高生長と認め之に憑據し差違ある生長を以て外界の影響なりと見做すことを得べし今茲に前表に依り連年樹高生長を見れば

本嶋に於ける薪炭材殊に思想樹の賣買は從來の慣行上多く重量に據るを普通とす尤も内地に於ても薪炭材は層積を以てし用材は材積を以てするを通例とするが如く林業思想

第三章 標準地材積調査
第一節 標準地調査の記載
標準地調査は前掲の調査標準第三、四、五六項に依り適當に標準地を撰定し定面積内の毎木調査を行ひ其年度直徑材積等を測定し(標準木伐採)林令を求め参考事項の調査を爲したるものなり
今之を一覽的に調査の儘總括表を示さんとす(後出(第四表参照))
第二節 地位前標準地の材積
前述に依り吾人は畧各標準地に於ける状況を知れり其頗る雜然にして一見了解に苦む處あるは吾人淺學の致す處なれども而も場所によりて同令林にしても尙大差あるを免がれずして勢ひ前述を根據とせる地位に於て之を至れり
今各地位に對し各林地の本數材積を一町歩に換算し表示すれば左の如し
第五表の一、地位前標準地材積表(後出)
第五表の二、思想樹想定材積表(後出)
第四章 枝條及乾材の單位材積に對する重量及枝條材積
第一節 枝條及乾材の單位材積に對する重量
本嶋に於ける薪炭材殊に思想樹の賣買は從來の慣行上多く重量に據るを普通とす尤も内地に於ても薪炭材は層積を以てし用材は材積を以てするを通例とするが如く林業思想

又之を樹齡によりて見るに
地位(單位材積重量一尺に對平均)
1 六四九斤
11 六六六斤
111 六八六斤

想の幼稚なる本嶋人關に在りても林木の賣買は多く全林の目測を以てし小は重量によるが如き亦以て怪むに足らず茲に於て特に樹乾の單位材積に對する重量を知るは徒爾に非ざるにあり項を分ちて之等の概説をなすべし
第一項 樹幹の單位材積に對する重量の測定
試驗方法として前記各標準地に於て標準木として伐採せる各材木に就き之を適當の長さにて切り中徑を測り其材積を求め同時に其重量を秤り之によりて一尺に對する重量を算出せり其結果左の如し(第六表)
(本表は余り複雑に付掲出を見合す若し其必要を迫らる諸兄は直接小生へ命せられし)
總本數五十三本 總重量三万四千九百七十斤
之を一尺に對する重量に總算すれば
六百六十斤
となる
尙參考として各地位に對する其平均數を見るに

樹地	年令	I	II	III
第三表	三	四、〇	三、五	三、〇
	四	五、〇	四、〇	三、〇
	五	四、五	四、〇	三、〇
	六	四、〇	三、五	三、〇
	七	四、〇	三、五	三、〇
	八	三、五	三、〇	二、五
	九	三、〇	二、五	二、〇
	一〇	三、〇	二、五	二、〇
	一一	二、五	二、〇	一、五
	一二	二、五	二、〇	一、五
	一三	二、五	二、〇	一、五
	一四	二、五	二、〇	一、五
	一五	二、五	二、〇	一、五
	一六	二、五	二、〇	一、五

尙一般に標準木を撰定せんとするに方りては成る可く完全なるものをとの希望よりして遂に優勢木のみに着目し以て聊か中庸を失するの嫌なきにあらざる今回は此點に就て大に注意を拂ひ且前述せし如く到處の標準地に於て適當し直徑を標準とし樹高を斟酌して一と認むるものを伐採せしが故に稍此欠陥を防ぎ得しと雖も亦一方に伐採後年令に比して却て樹高短少なる不自然の現狀を見るに至れり即ち(號地に於て八年生の三七尺なるに對し十年生の三四尺なりしが如し)斯くの如きは主として其直徑によりし弊害にして何れも中庸を失するものと認めて曲線によりて訂正するの外なし蓋し何れの方法を以てしても多少この誤謬を免がれざるを以て定則を按配して曲線法の行はるる所以なりされば爰以前表を圖示し曲線によりて三級の地位に別ち以て正當と認むる所屬高を求めんとす(圖は本文の終了後掲示するが故に参照せられたし)
第三節 各地位に於ける年令に對する平均樹高と連年生長
即ち前項曲線法によりて各地位に對する平均樹高を求めたる結果を示せば次の如し但三年以下は實地に於て殆んど其必要なく且種々の關係により著しく生長に影響を受けて標準を定め難く而して十五年以上と之を判定する材料に乏しきと經營上尙生育せしむるを得策とし收利を目的とする場合

之を殘存するもの少きを以て通則とするが故に之れ以上の生長を見るの必要なものと認め是等を省略し三年より十五年に至る生長を示すべし(收穫表等に於ても同じ)

第二表 (I II IIIは位級)

樹地	年令	I	II	III
第二表	3	一三、五	一一、〇	八、五
	4	一七、五	一四、五	一一、五
	5	二二、五	一八、五	一四、五
	6	二七、〇	二二、五	一八、〇
	7	三一、〇	二六、〇	二一、〇
	8	三五、〇	二九、五	二四、〇
	9	三八、五	三二、五	二六、五
	10	四一、五	三五、〇	二八、五
	11	四四、五	三七、三	三〇、〇
	12	四七、五	三九、三	三二、三
	13	四九、五	四一、〇	三三、五
	14	五一、八	四二、八	三三、八
	15	五三、八	四四、三	三四、八

樹齡	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	21
重量	592	377	682	659	626	664	555	662	666	707	689	587	706	

前表に依りて見る時は位級を不るは其重量を増し之に生育する材木は其單位材積に對する重量を増す又年齡に就ては明ならざるも大体に於ては十年頃は次第に其重量を減し又之より昇るを見る

然れども之が斷案は有す能はず何んとなれば立地の狀況生長の如何樹齡に對する重量の變化等を研めさればなり故に今日の處一般に樹幹の一尺に對する重量は約六百六十斤なりと云ふに止む

第二項 枝條の單位材積に對する重量及平均重量

茲に枝條と稱するは狹義の意味にして直徑五分に足らざる葉附の小仔即粗朶を指すものにして之が測定に就ては適當の器具を要し不便なる本地(調査地)にては行ふこと能はず故に歸來局に於て「キシロメートル」を用ひ之を試験せり

今之等の材積を「キシロメートル」によりて測定したる結果は左の如し

取扱法	原料の大きさ		對する重量(斤)
	材積四方尺(重量)	材積四方尺(重量)	
葉付の小枝	〇・〇三三	二五〇	五五八

同葉を除き平均	〇・〇三八	二二〇	六〇五
同葉を除き平均	〇・〇二七	一九〇	五二六
同葉を除き平均	〇・〇一〇	七〇	五五七

而して其の重量は樹幹よりも少なるは確信なるも伐期の關係即水分の多少並に材の組織等に關係することあるを以て明言を憚り茲には廣の枝條即樹幹以外を檢算して平均を求むる時は枝條單位材積一尺に對する重量は約六百〇九斤(九十七貫四百四十匁)とするを適當とす

第二節 枝條材積

枝條材積は樹幹即ち幹材積を除きたる部分にして之が測定をなすには各標準地に於て標準木として伐採したる各林木に就き其枝條全部の重量を測定したり

今地位前年齡に對する各木の實測數量及一町歩當り總本數に對する重量即ち一町歩當り枝條材積を表示するは左の如し

左位標準地(號地)	樹齡	一本の平均重量	一條材積
18	4	0.515	2,703,750
19	4	0.860	4,076,400
10	8	4.348	6,308,280
13	11	18,090	19,707,200
23	15	10,400	17,264,000

II	III
16	4
17	5
11	同
5	同
12	6
14	7
1	同
2	同
8	同
3	6
21	同
22	10
4	15
7	6
20	7
9	8
15	10
	9,440
	15,481,600

本表は標準木の平均枝條材積を知りて該林一町歩に對する實測總本數を乘し以て全林の枝條材積を求めたるものなり凡て一材木の枝條材積は樹冠の擴張に基き又樹冠の擴張は樹冠の粗密に關する事多し

然れども亦土質殊に手法によりて右左せらるゝことは大なる關係を有す故に現存林の如く取扱に種々なるものに付直ちに規則ある數量を實測し得ることとは不可能なる可し

茲に前法に徒ひ該實測數を基礎とし曲線を畫き以て稍準確するに足る可き數量を求む

れば左の如し(一町歩當り)(第五圖)

第八表 (想定枝條材積(省畧))

算出法式 (自考)

(イ) 一町歩に對する枝條は第七表枝條材積實測表に基き曲線を作てて記入す

(ロ) 尺に換算は六百〇九斤(一尺)を以て枝條總重量を除したる商なり

(ハ) 平均一本の枝條は第五表の二(想定材積表)に於ける一町歩本數を以て總枝條を除して求めたる平均數なり

山林學校便り

○春季實習も豫定の如く進捗し去る五月一日を以て終局を告げられたれば翌二日講堂に於て實習懇勞會を開き茶菓の饗あり安藤校長は今季實習に對する講評を演述し化村實習主任は所感か述べられしが要するに今季の實習は從來に比して頗る優良なる實績を擧げ熱誠眞面目一致協同等の諸點に於て未曾有の態度を示したるを喜び將來尙一層の努力を要望せられたり實際今季實習は分量に於ても頗る多、殊に果樹園開墾事業の如きは確の地に成業を怪む程なりしに多數健兒の膏と汗とは遂に盤根錯節を斂の先に掘り取りて平潤の地といふ幾多の果樹は列をなして栽る付けられぬ又普通實習以外のものとしては寄宿舎庭園の植栽あり樅母松躑躅等を手當り次第實習林より根こぎ來て

中庭前庭側面などに植る付けしもの約數千本又舊校舍前にありし創立紀念の五木の太木をも移し植えて遂かに寄宿舎は花木の繁りを見せゆかしき住家とはなりぬ又宮川教諭の設計にかゝる高山植物園は講堂と特別教室との間の空地に造られたるが高さ四尺方二間許奇石を所るに立て大體の姿を御嶽に似せたるも面白し今は只基礎許なれどやがて之に高山植物の珍花幽草の植るられて曉は我が校の一つの名物とならん今季實習に於て只一つ遺憾に又氣の毒なりしは三年生丸山岩吉君が演習林作業中昏倒して木の根に頭を打ち裂傷を負ひたることなり幸ひに傷深からず校醫の手當同級生の看護により元氣づき日ならずして快癒せしは不幸中の幸なり

○五月二十三日午後一時半頃新開村字新町の山林に火災起り見る、擴大する様子なるを以て各學年其實習を中止し北村教諭宮田助手引率出發消防に盡力し漸く鎮火せしを以て午後四時歸校せるが翌日右所有者より校長宛左の禮狀を寄せられたり

肅啓昨日當區内原野に失火有之候節は御校より早速御駐付消火に御盡力被下難有奉深謝候多大の御庇護に依り區域全部の延焼を免れたるを得候は組内一同の只管感佩する處に有之候拜姿の上御厚禮可申上管の處略儀以疎箋申上候段不惡御叱容被成下度尙御校一同へ微意御鳳聲の程奉

懇願候頓首
大正三年四月廿四日
新町組總代 原 孫 七

○五月九日安藤校長は竹林講話の爲北佐久郡望月岩村田兩所へ出張十六日歸校せらる

○修學旅行、豫て申請中たりし修學旅行は五月五日其筋の認可を得たるか三年生は十日間二年生は八日間何れも關東方面へ向け五月十二日出發二年生は十九日、三年生は廿二日無事歸着せり付添教員は三年北村教諭、加藤書記、二年新家教諭、宮川教諭、宮田助手なり尙一年生は五月十五日十六日兩日七宮、大場兩教諭引率大桑、讀書、田立の各村に修學旅行をなせり

○主なる來校參觀者、四月廿四日元本校教師帝室林野管理局技師赤浦力次氏來校一場の演説をなせり四月廿九日京都府林業視察員磯部清吉氏外七名來校五月六日盛岡高等農林學業林科第三學年二、名武藤教授と共に來校仍て安藤校長は本校の施設につき説明し尙長野縣林業一般につき講話をなせり

○遙拜式、廿四日夜八時校庭に於て御大喪遙拜式を擧ぐ是より先き校庭土手際に片よせて壇をしつらく青竹を四隅に建て注連を廻らし中央に神籬を奉安し壇の前方左右に松明を焚き八時を合圖に職員生徒一同整列左の順序によりいとも莊嚴に式を終へたるが折しも満天星愁を含み山松を吹く嵐の

音も泣くかと怪まれ松明の光は幾度か明滅して哀痛の情をうそりぬまして代々木葬場殿の御有様如何ならんと思ひやるだに畏しや

- 式次第
- 一、職員生徒着席
- 二、敬禮
- 三、擧式ノ旨ヲ告グ
- 四、最敬禮
- 五、奉悼歌合唱
- 六、奉悼詞捧讀
- 七、職員各順に玉串捧呈
- 八、生徒總代玉串捧呈
- 九、最敬禮
- 十、閉式

奉悼詞

時は維れ大正三年四月十一日桃山の御陵十未だ乾かず國民の袂の雫はしもあへぬに畏くも重ねて 皇太后の宮の神去りましましぬと聞きて玉敷の都の内は云ふも更なり真木立てる山の奥、湘沫よする海かきくれて照る日も暗き心地して明し暮すに今日五月廿四日長くも大御柩をば代々木なる御葬の殿に移し奉ると聞きて悲の情更に新に泣く涙雨とふることを悲しけれ伏して惟みるに 昭憲皇太后陛下は明

治元年皇后宮に立たせられ給ひしより國母と仰がれ給ふこと四十五年よく明治天皇の御聖徳に配し奉りて關雎の御徳遍く宮の内外を化し給ひ大御心を救恤慈善の業に懸けさせ給ひては御恵みの露雨よりも繁く、慈みの波八州の外まで溢れ女子の教への道を奨め給ふとして金剛石の大御歌を下し給ひ或は農桑の業を興し給はんごとて大御手づから蠶飼の業さへ取らしめ給ひ御心を敷島の道によせさせ給ひては心の泉古より深く詞の林昔にも増して茂くたはしまし御謙讓御淑徳の御心はねは自らこゝにも現はれていかならん賤山がつなりとも優にやさしき大御心にうちも泣きぬべし云ひつゞれば 陛下の御徳は濱の眞砂の數へ盡すべくもあらじげに上もなき女儀の鑑ごと萬の民草空ゆく月のごと仰ぎ奉り慕ひ奉りしに思ひもかけす忽ち雲がくれ給ひにしこそ返すくも悲しけれあはれ今夜大御柩一度青山の御所を出でさせ給ひてはとこしへに桃山の東陵に鎮りまして又いつの日か還りましますべき又いづれの日にか御車の影をだにをろがみ奉らんあはれ悲しきかもあな痛ましきかなしかはあれど 陛下が遺し給へる賢き芳はしき大御風は永く後の世までも傳はりて千萬の民草の鑑とこそはならぬ我等國民は金剛石の御さとしを堅く心にとり持ちて學をみがさ才をはげみ

て直く正しき皇御國の臣ごころはならぬのみぞ只我等が 陛下に酬ひまつるべき道にはありける今こゝに大御葬を遙かに拜み奉りてせきくる涙止めあへず云はんすべせんすべだに知られぬを天翔りても哀と見らなはせと謹み畏みて白す
大正三年五月廿四日
長野縣立木曾山林學校長
正七位 安藤時雄

校友會便り

櫻花のあはれ續粉たりしも東の間地に委し蘇山は青葉若葉のさやめきに回繞せられ多くの健兒か春に汗し額に脂し手に畑ならぬ豆を栽植せし春季實習も愉快々裡に滞りなく過古帳の帳尻へ記入済となりしは早月の二日にて候ひきされば三日は午前八時より實習慰勞券々新入會員にとりては初回の講談會を催し候會長の辭に引續き多數の辯士は所謂絡繹として壇上に來往し縱論模議時ならぬ辯舌の華を眺め得て候當日の演題及辯士を記すれば次の如し
△開會之辭 安藤 會長
△研究部に對し希望 三年 田近善右衛門君

- △新學年の叫び 三年 伊藤正之助君
- △社會の表裏 二年 竹村節三君
- △思想の力 二年 都竹武次郎君
- △故郷 一年 平田久良治君
- △世の中 二年 森次 潔君
- △論より證據 二年 小澤 武君
- △己を知れ 二年 土屋 弘平君
- △教育の目的 二年 古畑今朝茂君
- △何をいふか 三年 丸山 岩吉君
- △林業 一年 清水 徳久君
- △体育の必要 一年 明畑 榮市君
- △廢兵問題 一年 吉川 光夫君
- △青年と希望 三年 松澤 敏男君
- △當つて碎けろ 一年 宮嶋 岩見君
- △日本の名花 二年 宮下 孝美君
- △第二國民 一年 長坂 清人君
- △所感 二年 川口勇次郎君
- △上伊那農學校視察談附高山植物園に就て 宮川 先生
- △實習所感 北村 先生
- △閉會之辭 新家 先生

候ひきこれらの三省は交々我を樂しましめ時の移るも知らず午後三時半に到り閉會致し候(五月十日翠郵生)

寄宿舎より

すゝもん生
寮より申上候晩春より初夏へかけて自然の變移は際やかに見ゆると共に寮も亦事多く御座候新入舎生三十餘名を迎へたる後は各室とも滿員の体にて談聲は室に溢れ申候四月の暮るる比ひ舎前の苗圃は悉く實習の汗と熱心の膏にて美しき緑を呈し規則よくも方形の輪廓に入れられ候加ふるに舎の四周及中庭には舎生の協力によりて植へられし針葉樹の樹種數十百株有之舎の風采を高からしめ候實に草木は地の飾りにて又生氣を與ふるものにて候流石寒國ありて櫻はりの頃やうやく満開にて候されど新開の奥にありては唯僅かに黒川邊の兩三株を望むのみにて霞か雲かの状態を見むには是非とも福島迄少くとも黒川渡以南迄は出張の必要有之候ひきよれにつけてもうれしきは校庭附近なる卒業紀念の小櫻樹にて候よ「あはれ十年の後來て見むかな」とは舎生の異口同音の嘆聲にて候よ。五月は意々來り候新緑と薫風この二者に世は活動の度を増し候舎には新に水揚唧筒据付られし故に新しき洗面所も新しき浴場も利用せられ苗圃に立つ時浴場の煙突より立昇る燻樺色の烟を望めば半ば疲れを醫さるゝ思有之候ひき又菓子販賣部も設けられコンパの卓上一さわの

通信

誓程一千日 (二)
在佛都 高樋 生
○稽程一千日は聊か理由を抱持して立てる所のものなり然るに第一信以來博覽會用務にて在京約二十日此間中々に多忙に消過せ

知らず、トチノ踊など今年始めて見し程にて、他神事式など一般は尙更に候、故にたい御客として見しまゝの事と御承知相成度)先づ廿日は莊陣屋(恰當の字を知らず、竹軒先生の高教を仰ぐ)籠りにて二人の射手さん(少年にして毎年二大字に限り順番に出す)の一族が境界中定められたる家に引移り、廿一日にて射手さんは、神馬にて住吉濱まで潮浴びに越さ候。此夜はトチノ踊とか申して双方の一族が、拜殿の神官を中央にして兩列に居並び、東西より○使一名宛出で、神前に供したる大なる徳利を額上に捧じてトチノの足音高く三回巡り後神酒を注ぎ歩くものにて其折各自の前なる提灯を多く蹴飛ばす方が勝となる由次で廿二日の夜を、八王子さんの神輿御下りあり(俗間言ふ、八王子さんは一番弟子なれば一晩早く来る)と、廿二日晩には上山王及下山王の神輿を西と南とより(因に本社前は縣道三方に分る)遙に万燈の燈き嚴かに又鬼太鼓神馬等も落合ふ事とて其賑やかさ實に想像外に候。尤も鬼太鼓の柏子に連れて舞ふものにて、之に獅子二組添ひ後者は、數十頭の馬が今日を晴れの衣裳にて駆込み(二馬のランニング)駆出(全上全部にて等内に入れば賞品あるにつき酒機嫌の馬子供相争ふ痛快事)をなすものにて一見野蠻を極むるが如きも是亦思ふ程にも候はず、尙當地方の祭禮は、家寶の器具を

一度美望の的となりし日なり、ポブラリテイタムたりしなり、然るに余は花の御江戸に痛切に感したる一大事實は在京婦人の亡國の臭命を得た發揮せる事なり天下の美人クレオパトラは羅馬の大英雄アントニウを葬り去れり美人は尙第三期に於ける赤松林の如く其艶麗愈々佳にして衆目を聳たしむるは彼の赤松林の落葉を掻き地表を裸出せしめて表土愈々減耗して亦一被物無きに至れるに比すべく女性の榮譽は亡國の基因をなすに至る心すべきは美なり、聞くな美人の言茲に美人亡國論一章を阿す阿々(四月廿四日)

警程一千日 (三)

中村君!君も大町の山中で病んで居るつてネー御察し申すよ、病身の者は活社會の進歩を阻碍する罪人だ、落伍者は時勢の進運に逆行するもので何れも早く死んだ方が社會へは忠義だとは健康の時には得意になつて云つたものが借御自分様が病床に日を暮す様になつて見ると中々左様な譯には參り申さん、君も三四の頭顱を擁して御負けに禿頭の養父や山の神をも伺つて行かにならんし僕も六つと二つの餓鬼共を抱へて居つて見ると社會の爲めとは云へ中々ソ易々と死ぬるものじやないよ、君の方が餘程先輩だと云ふからモト全快にも間があるまいシツカリ静養し玉前前途は遠遠

春の島より 前野生

櫻花既に散り、鶯漸く考ひたりと雖も、庭前の牡丹將に開かんとし、野面に輝く黄菜花は、なほ遠き濃美の廣原を偲ばせ、山吹の色香を懐しき木曾谷の、清流を髣髴たらしめ候。 嶋の春は、今や農繁期に入り、稲苗は寸餘、麥は尺餘の丈に延び居り候。今年も氣候不順の傾あり、二月に暖く、四月に寒く、殊に稀なる大暴風さへありて、稍不安の状態にこれあり候ひき當地の播種は四月十四日 前後にて恰も嶋中第一、否、越後にても有数の山王祭りに相當致し居り候。 然し本年は諒闇の爲め、十日間御遠慮の意味を以て、廿四日に舉行され候、其模様を聊か申さんに、(然し小生も實際詳しき事は

持出し、所謂山海の珍味を饗して、村外の姻戚若くは知己を招待するものにて、實に良習慣と自惚れ、オット失敬、さて當日となれば七台の神輿渡御、數十の神官行列其他鬼太鼓を例の如く外に花車(本年はなし)なども十數台出で、よく地方人をして人出多き事(山王祭りの様)とまでいたしむる混雑を呈し候 又興行物中殊に本年はNS活動寫真も參り偶時嗜て、福嶋小學校にて招待されし時のパリー公園やら、鐘の響(ユキエさん)雪中の悲劇(二人少年デジョンの忠義)馬車のユーモア(九分通りヲウダイ)などあり(辯士とも)密かに懐舊の情に堪へず、暗涙を洩し候 樂隊中に故U君に似たるがあり、もしや、○君でも居るかと思はれたれども、あらず、即感概の餘之を當年のクラスメイト諸君に告ぐるごと、斯くの通りに御座候

佐渡より 越 畔

去年便りに加へて共進會林業室の大體の模様を左記(當時の新紙轉載)によつて御承知ありたい (前略)右へ廻つて三十間の廊下を一直線に往くと八十坪の大宴會場が今や裝飾の眞最中であるその横道(仕切つた)を往くと林業室の外に木材陳列場がある角材や板材が澤山にある新穂の青木寅治出品黒柿の

板材(代拾參圓)が眼に着く次に竹の陳列がある双生淡竹孟宗などがある雀の作り物でも行つたら猶面白からうではないか其次は木炭小屋がある前は八等木羽で葺いて後は杉皮で葺いてある木炭は澤山あつて品質が孰れも可い林業室の人口には未だ額は掲げてないドンなものが係員に聞くと天機洩すべからずと答へた林業室の天井は五色のシウオン(及モール)を四方八面に引いてある正面の高段欄間には金の十六葉の菊の御紋章を付けられてある此處は畏くも帝室林野管理局よりの參考として出陳を許可されたものである木材標本の額を掲げ中段には推茸の年中乾燥物推茸標本年度別割木が列べてある推茸栽培場の形状は何つかの額によつて表示されて居る次は郡有林の出品である木酸液製品見本が數種副産物としては黄連や木の實なども種々出してある栗の木材もある西側一面には槻木板類や黒柿などが列へてある南側には新穂高野喜八郎出品黒柿の床柱がある價は壹百五十八圓の黒柿床柱は小木の金井松蔵の出品徳和からは名産基盤が何面も出て居る石塚圓次郎のが最も可いと思つた其他下駄材木羽材が澤山に出陳してある中央の壇上には榎栗杉種子など種々並べてある僕は過日富山の共進會の林業部を見たが到底較べよう出来るものではない何よりも光彩を放つものは帝室林野管理局の出品である一郡の共進會としては全

り而して二十八日歸長以來中忙が少忙かの間に本日を迎ふ、加之意味有るべき稽程一千日は何等稽査する所なく顧みて何となく物足らぬ心地せらる、總て中忙少忙の日は勿体なき限りなり、而してシシナ日には爲すべからし何事も願慮せで行くが常なり○故に無稽程の數行を綴りて餘白を借る事とせん乎 ○竹の枯死は近來の大々の痛恨事なり、由來我信濃國は竹に多くを求むるは不合理なるの理由を以て余は寧ろ桑園に變つたつあるを最も時宜に適應せる變轉なりとし來れり(其間行に開する著書三三は通讀せり)然るに前年來講習會に列席して民間の竹に關する知識の比較的進める事、竹類の應用區域又甚だ廣き事、而して現在に於ける因體狀態を見一般が或る物を得んとして蕩擄ける様を知ると共に竹界の救世主は今や天下の要望する所にして何人を以ても之に代ふる能はず實に得易からざる我が安藤校長をして長く一實業學校長たらしむるは人物經濟上より見るも如何にと思はる、我課にも専任課長も技師も今や欠員なるに!! ○竹論喧嘩も最早六七年も過ぎたれば何とか鼻の就き相なもと思はる切に専門諸先生の御指導を仰ぐ ○異性に縁遠き僕も縣下二百名中より撰拔せる信州代表的美人八名を引率して上京せしとして中々の騒ぎなりし、蓋し一生一代只

だよ!僕はモト二週間許り寝て居るが退屈紛れにバーレの萬國史を讀んで思を數千年の昔に通はして居るナニ助膜炎だと云ふがも一直に快癒するらうだよ!僕の親友の小瀧君も四國は別子銅山へ落ち延び又伊東君は島根縣へ行つた様だ御互に遠くはなるが木曾山林綱の力は愈々擴大して強國を加へて來る誠に嬉しい。 ナリ滑稽家の大脇君が台灣へ遠征を企て今じや中々鼻息が荒い面白いね!世の中は蘇門會も其盡だよ何れ折を見てね! (五月十二日)

國未會有であるとは勿論聯合府縣の共進會に在ても滅多には見られまい此室の主任は白杵平吉副主任は清水祐次〇〇〇〇〇〇何れも松業上に經歷を有する而も苦心の結果に成たものであるイヤ近日出来るものである

詞藻

秀吉家康性格差異論

短小矮軀を卑賤に崛起して風雲を捲き而かも乳離の天下を一統し一代の群雄を鞭笞操縦せし尤物や今來古往れ幾人かある惟ふに彼秀吉の如きうの勤績歴々功業絶大その人や偉なり大なりと謂つべきなり

涯なき濃尾平原の盡くる處山高く水長き參河の地に最爾として蹶起し諸強族の兵馬控懐たる間に介在し而かもよく戦守し遂に霸權を掌握し一世の諸豪を束縛使せし英才家康の如きも亦上下三千載の青史を照して光芒陸離殆ど其匹儔を見ざるなりその治績や宏汎其惠澤實に百世に加はる彼も亦偉なり大なりと謂ふべきなり而して彼秀吉や毫邁淵達の資家康の性や深沈大度固より軒輊し易からざるなり

乘し衷情心服し反撥の余地なからしめ而も加ふる少壯以來の苦楚辛酸は具さに下情の機微に通じ以て事毎に永久鞏固の成功を得たりその創業の經世皆彼が深沈大度なる性格の然らしめし處にあらざるはなし秀吉嘗て「天下又我に敵するものなからむ」の豪語を吐き家康は「人の一生は重荷を負ふて遠き道を行く云々」の警句を作すこは一斑に過ぎざれども以て兩者の全豹を知るに足らむ秀吉の自信自負の強烈なる家康の忍耐自重の謙遜なるを見るべき也前者の自負は溢れて大明征討の役となり後者の自重は凝つて生民慰撫の惠與となるよし彼の明韓併吞を能くし得たりともりの經國濟家の大業は期せずして彼家康の腕を振ふるあるに俟たんのみ

要するに秀吉は進歩的の戰略家にして家康は保守的の政治家なり斯くの如く積極消極二者が而かも同時代の廟堂に立ちて亂麻の四海を掃蕩し相補し相藉り以て一篇の邦建史を構成せる實に千古の奇觀と謂ふべくうの鴻業壯圖の今に到る迄赫耀として後昆を照すものあるは宜なる哉

人生趣味の生活とは何ぞ

二年生 佐渡坊

同じくこれ人間等しくこれ五十年の生涯を通じ吾人は過去の數千年及び無限の未來を觀想する毎に常に想起するは人間が如何にして生き如何にして死するかと云ふ事のみは吾人の心靈をして忘れしめないであらう温靜なる感情と思想を以て此問題に當れば必ず皆趣味の根本なる事を自覺するであらう然らば其趣味の性質は如何實に吾人が存在を全からしむる完全なる生活其生活と云ふ問題に當り其根本となるべきものは即ち趣味である然らば趣味に基きたる生活とは何を指す如何なる要素の種類ある次にこれを述べれば最も廣き意味の生活最も充實せる廣き同情にもとづける生活である而して野邊に咲く花一片の草にも全能の神の榮光を認むる生活生老病死を觀て感奮努力する生活人生の意義目的理想を以て社會に突進する生活日日最善の徳を治め後悔なき生活死の刹那に於て過去の一生を顧みて毫も

懺悔なき生活である釋迦孔子ソクラテスの生活理性と愛の爲めに自己を犠牲にして碧血を社會の根底に流し永遠に地の塩となり世の光となり偉人即ち前述の如き彼の偉人等の生活聖者の生活である嗚呼吾人は福なる哉此廣力し得る廣大なる天地に處するを得且つ自由なる舞臺に立ちて飽くまでも力強く人生の價値と意義を表すを得る現代に生れたるにはあらずや我友抗け原の健兒よ大に自覺せよ妄想を消滅して嶄新なる即ち肉から靈を窺ふ自覺を表現し且つ宏い生命の生々たる元氣を自己の體內に通はしめて實力を鼓吹し活動の汗を社會に雨降らしめよ乞ふ杭ヶ原の健兒幸に自重あれ!!!

春雨の後

三年 信天翁

緑淺い楊柳に美しく降り注いだ微雨も、今朝は空さびげなくはれ渡つて樂さうな小鳥の聲がしめやかな空氣に漂ふて耳に流れ来る。濁なく澄んだ空氣を胸一ぱいに吸ひ込んでほつきりと見える近い丘や遠山を眺めるとすがすがしい快氣分が身内を流れる黒い土も蒼い石も屋根も垣根も一ぱいに濡れて色が鮮かになつた萌へ出た若草や一二寸に伸びた青麥はうれしそうにほゝんで雨の恵を祝ふてゐる葉もない柿の木の下裏には白い透きとほつた露玉がブラリと下つてゐて時々スル／＼と枝から負へつてホタリと地に落ちるとすぐさま地の中に

新緑

三年 すのそん生

若き梢に緑うひ 遠き翠微の色深み わか住む里に夏來ぬ 廻る蘇山の山なみに ゆるく流れし八重霞 瑠璃の御空の果遠く 春の女神の裳を捧げ 九十の春光先づ日に 草のいぶきも花の香。 鳥の叫びも水の音も 今また後に見返りつ わが世の春は淡き 悲哀の裡に消へ逝ぬ。 春立ち去りし朝な夕 木立は風に囁きつ 若葉は露によりそ。 床しき風野らに満ち 葉末。玉地にこぼれ 斯てもあらぬ懐しの 我が世の春を慕ふ也。 葉櫻黒く山毛櫨かく 一もと杉や産土の 森の白鳩ボーと呼ぶ 今日の日和の麗かさ 白き日映。白き家の 裏道づたひ山とへば 雑木林の落葉道 新緑の香や漲りて 茂る若葉に天も見す 臥せども土に光なく 午後。日射はたい堪し。

翠の精の融け出しはた地の神の美酒
 落葉踏み岩が根に 平滴たる苔の露
 追分節を濁み聲に 唄も山越ゆ馬子達の
 洞れし咽喉を濕せば 鈴音消ゆる青葉影
 眞清水あゆかし 桐三つ五つ立つ畑
 花紫に葉の宏き 鄙美しや何の唄
 桑摘む乙女見隠れ 夏を讀ふる愛の曲
 たい平和なる山里の 夏はいやたけ新緑は
 とも思はれつ我里の 眠れる人の醉る間に
 強く濃く又淡くさめ 秋の彼方に遷すなり
 あゝ我はたい新緑に 醉を謳ひたすらに
 夏の御神を謳はなん 夏の緑を喜ばん
 奇しき自然よ我は唯 長き自然よ我は唯
 りの懐の抱擁に 盡ぬ和平の氣を吸ひて
 新緑樂み謳はなん

和歌その折々

竹軒生

岩淵の木は世をわたり山の翁は魚つりてあり
 古の賢き人もかくしころ山川の瀨に心遣けめ
 長閑にも鶯が谷川の木立よろしむ鶯のなく
 谷がはの音に曉のねざめさやけし鶯の聲
 卓は女主はのどやかに歌よみてあ紅梅の宿
 馬に鞍をさしひく人もも櫻花の春やまざと
 麻衣きその山住の思ひしよによとせへに覺
 元書記安井氏慰勞金申込報告
 金參圓 塚原吉右衛門君
 金壹圓 本三樹君
 金五十錢宛 松本清太郎君
 松島九平君 千村善三君
 半島修君 北川信美君
 山村克人君 川合清行君
 種口徳一君

横山治人君
 松本貢君 岡田恒治君
 和田宗吉君 金井澄水君
 中島信敏君 久保田吾良君
 上原則君 高橋博君
 渡邊知則君 諸君は通知

金四十錢
 金參圓四錢
 (右九名高樋博取扱、右九名の諸君は通知)
 金額至急取扱者(高樋)に御渡し被下度候
 金壹圓
 (前號西野入徳君の分を五十錢とせしは)
 雪圓の誤に付訂正す
 小計拾參圓參拾錢
 元教諭林氏慰勞金申込報告
 市岡淳一郎君

金壹圓宛
 金六十錢
 金五十錢
 金八圓五拾錢
 松本貢君 岡田恒治君
 中島信敏君 金井澄水君
 上原則君 久保田吾良君
 渡邊知則君 高橋博君
 至急取扱者高樋へ御渡しを乞ふ

金五拾錢
 金壹圓
 小計拾參圓六拾錢 累計拾七圓五拾五錢
 元助手川崎氏慰勞金申込報告
 金貳圓五拾錢 杉本貢君 岡田治君
 和田宗吉君 金井澄水君
 中島信敏君 久保田吾良君
 上原則君 高橋博君
 渡邊知則君 諸君は通知

金五拾錢
 金壹圓
 小計拾參圓 累計五圓八拾錢
 校友會の決議に基き東北九州災害救濟會
 へ拾五圓満州戰蹟保存會へ五圓寄附の處左
 の通り領收書受領
 拜啓 本會の趣旨を賛成せられ金十五圓御

寄贈を辱し感謝の至りに堪へず右は御
 寄附の趣旨に從ひ災害地に分配可申不取
 大正三年五月十五日
 東北九州災害救濟會總裁候爵 松方正義
 校友會長宛

本會の趣旨を御賛成相成前記の金額御寄
 附被下御芳志悉く正に領收仕候右不取扱
 御挨拶迄如何御座候敬具
 大正三年五月十四日
 滿州戰蹟保存會長男爵 福嶋安正

坂本忠治君は今回鷺津と改姓せられたり
 新任及び轉任の諸氏及任地左の如し
 福嶋縣相馬郡石村財源氏 田村大君、白
 山梨縣甲府郡恩賜村財源氏 田村大君、白
 田縣區署柳澤早口小區署千村吉雄
 林區署原野君、全早口小區署千村吉雄
 高君、帝室林野管理局酒井光義君、全赤
 櫻田君、全野野管理九回卒業馬郡郡
 第七回卒業生原耕民君、群馬縣馬郡郡
 井村役場齋藤海藏君、埼玉縣廳内第四回
 卒業生矢嶋駒二君

先般修學旅行の際には御繁務中にも係らず態
 々御出迎を受け懇切なる御案内且つ御芳贈
 を對し御感銘の至りに不堪候茲に諸上を借
 りて厚く御禮申上候
 五月廿五日
 同二年生一同付添職員一同
 鷺津忠治君 林恒一君
 小羽根安治君 島田雄太郎君
 前田正義君 西尾嘉一郎君
 宮崎喜太君 脇田義正君
 酒井光義君 脇田義正君
 市岡新一八君 岡田謙三君
 松嶋周作君 久保田吾良君
 原田久保君 久保田吾良君
 渡邊知則君 石坂季治君

赤羽直高君 宮崎喜太君
 杉本直高君 酒井光義君
 今井健治君 市岡新一八君
 吉澤英雄君 松嶋周作君
 竹内茂殿 原田久保君
 渡邊知則君 石坂季治君